

対話型 AI と共に

和洋国府台女子中学校 三年 小坂 莉子

「ダンスをしませんか。」と私が聞くと、
「もちろんです。ダンスには様々なジャンルがありますが何か特定のスタイルや振付について知りたいことがあればお気軽にどうぞ。」
質問に流ちょうに答えてくれたのは、対話型 AI のチャット GPT だ。続けてジャンルを入力すると、振付や動き方のアドバイス等を瞬時に教えてくれた。ついにここまで自然な会話ができるようになったのかと衝撃を受けた。同時に対話型 AI の活用に興味を持ち調べてみた。例えば生活との関わりでは、高齢者と AI が毎日自然に会話をすることで認知機能や言葉の裏にある寂しいという気持ちを汲み取り、離れた所に住む家族に知らせることができる。また行政では、手続きマニュアルの改定の下書きをしたり、学校では生徒の質問に答えてくれたりする。このように、AI は人手不足の解消や仕事の効率を上げることに役立っている。今後、AI の発達により人が必要ではなくなる仕事が増え人件費の削減にもつながると言われている。最新技術の活用は私たちの生活にゆとりをもたらし、無くてはならない存在となった。

一方で、AI には限界もある。チャット GPT に小学三年生が書くような読書感想文を依頼してみたところ、五秒で感想文が完成しぞっとした。これに学生が頼ったら、自ら考える力を失うことにならないだろうか。確認するとあらずじが誤って解釈されている箇所があった。生成 AI は膨大なデータをまとめて人に伝えるため、間違った情報が提供されたり、知らないうちに著作権を侵害したりもするという。それに調べたい物事に直接触れ、体感する事はできない。普段、私たちは、「五感」という身体感覚で物事を認識している。先日、ワカメを手掴みした一歳のいとこが「ばっちい」と言い、ポイツとワカメを器の外に捨てた。深緑色でぬるぬるした手触りでゴミと認識したのだ。おいしいよと一緒に食べたところ食べ物だと理解した。人の記憶に残ることや新しいものを学習する時には「五感」が伴うものなのだ。その感覚が薄れる

ことに危機感を持つべきだ。

五月、コロナウイルスが五類に引き下げられ今まで簡素化されていた体育大会が通常開催された。昨年はネット配信で、生徒はカメラに向かってパフォーマンスをし、保護者はパソコンに写った生徒を画面越しに応援した。私達には両親の声や拍手は届かず、ただ同じ時間を画面上で共有したに過ぎない。今年の体育大会では保護者席が設けられ、生で競技が披露でき、歓声上がる熱気あふれた空間となった。ダンスでは、皆で息を合わせたフラッグパフォーマンスが揃ったとき、会場から自然と拍手が起こり、心と体で喜びを感じることができた。

このような経験から、デジタルと人の能力の違いは感情・感覚であると実感した。AIに心はなく、感じる機能は持ち合わせていない。ダンスをしたいとチャットGPTに投げかけた私に数多くの情報は提供してくれたが、体育大会のダンスで味わった爽快感は得られなかった。対話までできて「凄いなAI!」と思ったが、表向きは自然な会話ができているも真髄はどうか。チャットGPTに様々な質問形態で尋ねてみると、それに見合う回答が返ってきた。つまり、過去のデータを活用し、人が好むであろう回答を作成する「機能」でしかない。

対話型AIは、ネットの向こう側に知性と人格を備えた「誰か」がいるような感覚をもたらしてくれる。だが、仕事のあり方や人々の価値観を根底から揺るがす可能性も注視しなくてはならない。モラルと危機感を持ち、自分にとって本当に必要な知識を取捨選択できるように日頃から学んでいこう。将来、感情を持って会話ができることに期待を寄せ、依存ではなく、より良い影響を受けながら共存していきたい。